



News of Osaka Micropaleontologist

NOVI

No. 2

November 74'

大阪微化石研究会機関紙

特集 “海洋プランクトンと堆積物” シンポジウムおよび第3回プランクトン会議報告

西ドイツ, キール大学

1974年9月5日 - 13日

上記シンポジウムの概要, 本会議に先立ち開催されたコンサルティング・グループ会議および第3回現生および化石珪藻シンポジウムの結果を会議に出席した各専門家から報告します。

キール会議を終えて

— 一般的経過報告 —

高柳 洋吉 (東北大学)

今秋、西ドイツのキール大学で開催された“海洋プランクトンと堆積物のシンポジウムおよび第3回プランクトン会議”は、9月13日に幕を閉じ、32ヶ国から参加した340名あまりの参加者は、キール大学のしゃれた建築の大講堂の内外で、お互いに別れを惜しみつつ思い思いに散って行った。縁あってこの会議の開催計画に当初から関係した筆者にとり、正直な話肩の荷がおりた思いであった。この会議の真の推進者であるキール大学の SEIBOLD 教授は、国際的に著名な精力的組織者でもあるのだが、流石に会議の終り頃になって、あまりの雑事の始末に疲れはて頭痛を訴える位だった。したがって本当は、彼こそ真の解放感を満喫した人であったにちがいない。

会議のあらましを報告するにあたって、どのようにこの会議が計画され、そしてどういふふう運営されたのか、舞台裏のことも少しまじえて記しておきたい。国際学術連合(通称 ICSU)というのがある。1971年、Madrid で開かれた SCOR の執行委員会において、西ドイツの SCOR の国内委員会の提案により、海洋プランクトンと堆積物についての第3作業委員会が創設され、次のような課題が付託された。すなわち (1) 現海洋の諸条件の指示者である表層堆積物中の生物遺骸をも含めて、海洋堆積物中に存在する浮遊性生物の遺骸の分類、化石層位および環境推定についての諸原則の討議、(2) 海底の層位と陸上の層位の比較、および (3) これらの話題についてのシンポジウムの準備である。この委員長には提案者側の E. SEIBOLD 教授が就任を受諾し、同時に A. BÉ (米田), H. BOLLI (スイス),

B. M. FUNNELL (英国), W. RIEDEL (米国), 高柳 (日本), A. P. Jousé (ソ連) が委員に選出された。

上記の付託条項を一読されればただちに気付かれるであろうが、この内容は、1967年に英国のCambridge大学でシンポジウムを開催し、その成果をFUNNELLとRIEDELの編集による“The Micropalaeontology of Oceans (1971)”という大冊にまとめた、SCOR第19作業委員会(日本からは金谷太郎博士が委員として活躍された)の仕事の延長路線というべきものである。

Kielの会議開催に至る間に、作業委員会が1回開かれている。それは、1972年にカナダのMontrealにおいて行われた国際地質学連合の第24回総会の機会を利用したものであったが、この時にはJousé 女史を除く全員が出席している。そして付託内容の吟味、シンポジウムのプログラミング、参加を勧誘すべき研究者のリスト作り、招待講演者の選考、出版計画、財政問題等につき相談を重ねた。この時点で明らかになったのは、SEIBOLD教授がSCORシンポジウムを主催するのを好機として、1967年に第1回目の会合がスイスのGenevaで、次いで1970年に第2回がイタリアのRomaで開催されたプランクトン会議を、是非Kielでやってもらいたいと要請されていることであった。過去2回にわたる同会議のめざましい成果が、いずれも2部よりなる大冊の本にまとめられていることは周知の事実であろう。しかし、シンポジウムとこの会議を合併して開催するのはよいとして、その後始末としての出版は難事業である。国際シンポジウムに寄せられた論文中には、単に語学的視角からのみでも問題のあるものが少なくない。Cambridgeシンポジウムの成果刊行に大変な苦勞を重ねた両

編集者が参加しているこの作業委員会としては、深刻に出版計画を検討せざるをえなかった。その結果、SCORシンポジウムとプランクトン会議の合同会議は、招待講演を主とする前者を午前中に、一般講演からなる後者を午後にごくとし、成果の刊行はシンポジウムに関してのみ行うことに決定した。膨大な論文の編集に手間どることは、今日の微古生物学や海洋地質学の急速な展開のステップにふさわしくないし、一般講演として報告された論文が、各種の学術雑誌にできるだけ早い機会に発表されることはむしろ望ましいと判断されたからである。

さらに、作業委員会に課せられた業務を最も能率的に行う手段として、本会議に先立つ数日間に、浮遊性生物の各部門の専門家会議を個別的に平行して開催し、それらの結果をシンポジウムの期間中に報告させることとした。これが、コンサルティンググループ会議とよばれるもので、各グループはせいぜい2人程度に参加者数をおさえ、その具体的人選と議題の選択は、作業委員より指名された座長、副座長にゆだねることとしたのである。

以上の経緯のもとに、今年9月5日より7日にわたって、コンサルティンググループ会議がキール大学地質学教室において行われた。グループと座長をあげると、浮遊性有孔虫(座長高柳、副座長R. OLSSON)、翼足類(座長C. M. LALLI)、放射虫(座長M. PETRUSHEVSKAYA、副座長M. CACHON)、珪藻(座長H. SCHRADER、副座長L. H. BURCKLE)、珪質鞭毛藻(座長H. Y. LING)、うず鞭毛藻(座長F. J. R. TAYLOR、副座長M. ROSSIGNOL STRICK)、ゴリス(座長K. PERCH NIELSEN、副座長D. G. NOËL)である。グループの会合計画は全く独立に企画されたものであったし、この会議計画

の基本的構想が十分座長に伝わらなかったグループもあって、会議の持ち方は種々さまざまであった。その点は後の報告者によって明らかにされるであろう。

シンポジウムと併合開催されたものは、結果において第3回プランクトン会議の他に、もう一つ“第3回現生および化石硅藻シンポジウム”があった。9月9日から13日に及ぶ5日間の本会議では、8時半から13時の時間帯を20の招待講演に用い、13時から15時半までを昼食をはさむ自由時間として、非公式の会合や討論にささげ、15時半より19時まで4会場にわかれて、約130の一般講演の時間とした。作業委員会のメンバーは委員長をのぞき、すべて招待講演の部の座長をつとめさせられ、最終日の当番にあたった筆者ははなはだ閉口したものである。一般講演の部では、青巖常正、林信一の両氏がやはり座長団に加わってサービスされた。成果は、当初の企画どおり、招待講演とコンサルティンググループの勧告を合せて、1巻にまとめ、New Yorkのアメリカ博物館のMicropaleontology Pressより出版される。編集はスクリップス海洋研究所のRIEDEL氏が担当する予定である。

SCOR第37作業委員会はシンポジウムの終了をもって付託された任務をおおよそ果たしたわけであるが、シンポジウム終了時に開催された委員会において、次のような総括を行い、かつSCORに対する勧告案をまとめた。

Kiel シンポジウムにおいて特に評価されるのは、同じ浮遊性生物を研究する動植物学者と古生物学者の間で接触の機会を設けたことである。多くの研究発表の結果、各種の浮遊性微化石群の化石層序の相互関係が明らかにされ、この分野における統計処理法の適用に著しい進歩が見られた。さらに、現生と化石の生物地理と生態の資料の組

合せに統計手法を用いて得た、多くの結果が報告された。深海掘削計画(DSDP)による試料の研究結果がこのシンポジウムにおける多くの報告や討論の源泉となり、このプロジェクトが、今回の会議で扱われた諸研究分野にいかにか劇的な効果をもたらしたかを良く物語っている。

5項目にわたる勧告は次のとおりである。

- (1) 現在から地質時代にさかのぼって、海洋性浮遊性生物-底生生物-堆積物系の進化を理解するために、これからの研究の進展の期間を考慮し、約5年以内にSCORが総合のための会議を開くよう勧告する。
- (2) 骨格をもつプランクトンの生活環境、生活様式ならびに殻形成を理解するため、これらのグループについての野外実験と実験室内での飼育を盛んにするよう勧告する。
- (3) 骨格をもつプランクトンの現生種の分布と、未だ研究の進まぬグループの分布図の編纂の研究を勧告する。
- (4) 骨格の堆積や溶解、埋没、続成作用に関係する深海底の境界層の理化学的・生物学的研究にもっと関心をむける必要がある。
- (5) 第37作業委員会は、約1年後と見こまれる本シンポジウムの成果刊行後、解散することを勧告する。

## コンサルティンググループ会議報告 —浮遊性有孔虫グループ—

高柳 洋吉 (東北大学)

はじめの一般報告にも記したように、筆者は浮遊性有孔虫の方の座長に指名されていたため、過去約1年をかけて、この会議の議題を選定し、かつ話題提供者への参加交渉にあたった。その間多忙な一線級の研究者をこの時期に一堂に招くこと